

学

園

長

だ

よ

り

第43回

軒昂たる意気

愛知淑徳学園理事長・学園長

小林素文

本年度は愛知淑徳大学開学50周年。当初文学部1学部だけであったのが12学部となり、1995年に男女共学体制になったことも相まって、様々な学生が集まり散ずる大学となりました。

大学が発展的に50周年を迎えられますのは、愛知淑徳学園の120年に及ぶ信頼と実績に支えられてのことであり、学園の高等教育の柱として40年の長きにわたり存在した愛知淑徳短期大学（以下、淑短）のお蔭であります。

*

淑短は1961年に開学しました。

当時の大学進学率は10%程度。女子に至っては6%に過ぎません。愛知淑徳高校においても就職が40%と最も多く、大学進学は25%。大学といっても短期大学がほとんどで、就職も進学もせず、家庭で花嫁修業をする者も15%いた時代でした。

淑短を創設するにあたり、どのような学科を希望するかのアンケートを愛知淑徳高校PTAに行ったところ「家政科」が圧倒的多数でした。将来家庭で直接役立つことを身につけ良妻賢母となつてほしい、との願いがまだ強かった時代でした。1961年淑短は入学定員80人の家政

科で開学しました。教学の中心となられた河田幸次郎先生は小学校卒の学歴でありながら、苦学力行の末、大学教授になられた方で、短大であっても研究が大切であると、研究紀要を発行し教員の切磋琢磨を求め、学生たちにも卒業レポートを課し『レポート抄録集』まで刊行するようになります。

3年後に開設された国文科の中心となられた村井順先生は、文学作品の鑑賞・解釈だけでなく創作をも柱とし、さらに教員養成にも力を入れ、短大としては珍しく国語教員を輩出したことにより、淑短の名声を高められました。

その後開設された英文科とコミュニケーション学科も研究と卒業レポートに力を入れ「2年で4年制大学に負けない教育をする」と意気軒昂でありました。

学生達も意気軒昂で、学生が発行する『淑短短大新聞第76号』（1985年1月発行）で次のように記しています。

「淑短生はおとなしく、仕事については言われたことをきちんとこなし、協調性もあるので、一般事務にはびつたりだ」との印象を企業側はもっているようだ。しかし、これは単に扱いやすいだけの「職場の花」的女子社員である。…女性の実力が認められつつある昨今、女性の管理職も活躍している。「せっかく就職するなら腰掛けなどではなく、是非管理職を。」と目指してみるのも可能であるはずだ。

この記事が掲載されてから16年後、女性が「職場の花」ではなく、男性と同一条件で共に社会を支えるべく、高度な知識と技術の修得が高等教育に求められる時代になったことと、愛知淑徳大学が男女共学になったことが相まって、淑短は2001年惜しまれつつ、40年の歴史の幕を下ろし、その軒昂たる意気は愛知淑徳大学へと受け継がれていきました。



淑短フォークソング部（愛知淑徳学園70周年記念集より）